



測定随時受付中

ちくりん舎は、行政から独立して放射能汚染を監視・測定、情報発信する市民団体・個人の共同ラボです。

市民放射能監視センター

● 共同ラボ & 事務所

〒190-0181

東京都西多摩郡日の出町

大久野 7444

● 電話 & FAX

042-519-9378

● 電子メール

lab.chikurin@gmail.com

目次

- 危険セシウム粉じん吸入の恐ろしさを体感 …… 1
- 第2回通常総会がおこなわれました …… 5
- 「リネン吸着法絶対値評価プロジェクト」その後の報告(3) …… 6
- よもやま話 …… 8
- 会員募集 …… 8

セシウム粉じん吸入の恐ろしさを体感 飯舘村(長泥地区) 汚染土再生利用実証事業の見学会に参加

6月28日環境省主催の「福島県飯舘村(長泥地区)での実証事業の現地見学会」に参加してきました。

環境省は「復興再生利用」と称して放射能汚染土再利用を推進しています。汚染土は福島県大熊、双葉両町にまたがる中間貯蔵施設に埋設保管されています。中間貯蔵施設はこれまで数回にわたり見学会に参加しています。一方、飯舘村長泥地区での汚染土再利用実証事業現場は見たことがありません。ちくりん舎も構成団体として活動している「放射能拡散に反対する会」主催の「福島イノベの今と飯舘村長泥地区実証事業見学ツアー」に、ちくりん舎から2名が参加しました。

てほしい」との強い気持ちが出てくる……。そのような弱みに付け込む形で、環境省は除染と引き換えに汚染土再利用の実証事業を持ちかけ、住民宅を除染する代わりに村内の汚染土の受入れを迫りました。

条件は 5,000 Bq/kg 以下であり、これは長泥地区のより高い汚染度合いと比較すればかなり低いレベルです。環境省側との「協議」を通じ、住民は悩み抜いた末苦渋の選択をしました。実質これしか選択肢が提示されず受け入れるほかない状況に追い込まれ、最も多くの被ばくを強いられながら、さらに汚染土まで押し付けられたのです。その上、住民は

< 苦渋の決断で農地路盤材として再利用実証事業を受け入れ >

飯舘村長泥地区で行われている実証事業は、道路や鉄道などの路盤材としての再利用ではなく、農地用路盤材としての利用という点で特徴があります。飯舘村長泥地区は、避難指定された飯舘村の中でも特に汚染が高く、帰還困難区域に指定されました。他の避難指示区域は次々解除され元の暮らしへ戻る中、長泥の住民は追い詰められ不安や焦燥感が募り、「何とかして戻りたい」「除染し



長泥地区の実証事業全景
(環境省 HP 写真をもとに編集)

実証事業において「栽培支援員」として協力することを余儀なくされました。

ツアー 2 日目朝の勉強会で、このツアー企画のリーダーでもある和田央子さん（放射能拡散に反対する会・福島イノベを関する会）は、環境省の議事録などを丹念に調査し、長泥地区の実証事業受入れに至った経緯と実態を解説してくれました。

＜「花の里ながどろ環境再生ひろば」での挨拶と説明＞

飯館村役場からでも車で約 30 分以上はかかる山の中の長泥地区。そこには「花の里ながどろ環境再生ひろば」という、取って付けたような名前のプレハブの受入れ施設がありました。そこで中間貯蔵施設管理を請け負っている JESCO 職員の挨拶から始まり、そのあと環境省担当者からの挨拶までありました。更に放射線の専門家がアドバイザーとして来ているとのことで、その青木氏（ちくりん舎の青木ではありません）から約 10 分の説明がありました。JESCO 職員だけで対応する中間貯蔵施設とは大きな違いです。これまで何回も中間貯蔵施設見学ツアーをアレンジしている和田央子さんのグループということで、マークされていたのではと勘繰りたくなるような態勢でした。



JESCO 職員からの説明

説明のあと、全員に線量計を配布し、100 メートル程度離れた汚染土埋め立て地で線量測定をさせる、お決まりのパターンです。参加者全員にヘルメットは渡されましたが、マスクの配布はなし。もちろん私たちツアー参加者はあらかじめ N 95 マスクを全員着用していました。驚いたのは埋め立て地まで行く道路上で線量計は何と $0.53 \mu\text{Sv/h}$ を示しています。埋立覆土上では $0.18 \mu\text{Sv/h}$ 。環境省は埋立覆土により如何に線量が低いかを示したかったのでしょうか、こんな環境で一日農作業をするということを想像するとゾッとしました。

＜吸入被ばくの危険性について驚くべき無関心 - 案内バスでのやり取り＞

埋立覆土場所での線量確認のあと、一行は用意されたバスに乗り込み、1 工区から 3 工区までの農地整備を終えた場所の見学をしました。各工区ともに 20 ヘクタール程だということです。実際にバスから見ると、その平地としての幅の狭さに驚きます。数十メートル先には汚染されたままの山林が迫っています。

車中での説明が終わり「質問があればどうぞ」といことでしたので、さっそく手を上げて質問しました。



花の里ながどろ環境再生ひろばから
汚染土埋め立て地へ向かう途中

筆者：現場を見ると周りは除染していない山林が広がっている。農作業で1日8～10時間。屋外にいたら、吸入被ばくは大変なことになりそうだ。農作業の吸入による内部被ばくをホールボディカウンタか尿検査で測ったのですか？

環境省職員：工事中に空気中の線量は測って問題無いことを確認している（空間線量率と大気中粉塵の区別も出来ていないような答え）。

筆者：作業時にマスクはするのですか？

JESCO 職員：（きっぱりと）しません。

筆者：私たちの調査では南相馬の住民で尿検査したら毎日花畑で作業している方がボディあたり270ベクレル程度の慢性内部被ばくしている状況だった。お連れ合いは昼間仕事で自宅を離れていてとても低かった。これは吸入による被ばくが起きている証拠。先ほどアドバイザーの青木さんは外部被ばくと食品摂取からの説明はしていましたが、吸入被ばくについては全く説明していない。どうなのでしょう？ ちなみに、私の名前も青木です。（一同爆笑）。

アドバイザー青木氏：インフォームドコンセントが大事。長泥の住民の方々の地域に帰りたいという声をぜひ聞いて欲しい。

筆者：そんなもののインフォームドコンセントでも何でもない。ICRPでも微小粉塵は肺の奥の肺胞に沈着し、その分被ばくリスクが高いことが報告書に出ている。放射線専門アドバイザーというなら、あなたが吸入被ばくの実態をキチンと調べてインフォームすべきではないのか。先程のデータは、一昨年の環境放射能研究会の査読を受けた上で論文として掲載されている。

アドバイザー青木氏：ご意見として承る。

筆者：約束してくれるのですか？

アドバイザー青木氏：アドバイザーという立場なので約束は出来ない。

見学が終わった後、アドバイザーの青木氏がこのままではまずいと思ったのか、近寄って来た。

アドバイザー青木氏：先程の論文はどこを見たら良いのか教えていただけますか？

筆者：毎年3月に放射線防護や放射化学等に関する主だった学会が共同で環境放射能研究会というのを開いている。そこでの1 昨年の口頭発表です。それを論文化しました。「環境放射能研究会」のこと知らないのですか？

アドバイザー青木氏：……

筆者：ちくりん舎のウェブサイトから「環境放射能研究会」で検索していただければ、すぐ出てきますよ。

環境省と放射線の専門家と称する「アドバイザー」がいかにも、農作業など屋外活動と吸入被ばくについて無関心であるかを確認することになった一コマでした。

＜赤字木分岐では山林中で4.7 μ Sv/h＞

長泥地区の見学を終えての帰路、長沼から5キロ程度のところに浪江町方向へ向かう赤字木分岐点があります。飯舘村を案内していただいた伊藤延由さんが車を止めて説明を始めました。



バスの車窓から見た実証事業農地
（すぐ近くに山林が迫っている）

赤宇木と言えば、事故直後線量が最も高かった場所として有名な場所の一つです。伊藤氏の説明では道路上は一応除染してあるといいます。その道路上でも $1.3 \mu\text{Sv/h}$ 。道路以外は帰還困難区域内です。道路から 30 メートルほど山の中へ入るとそこでは $4.7 \mu\text{Sv/h}$ 。

長泥の実証事業周辺の山林も似たような状況でしょう。改めて農作業や屋外活動による吸入被ばくを全く無視している環境省、アドバイザー氏、そして、苦渋の決断で実証事業を受け入れた長泥住民が「栽培支援員」として、内部被ばくの実態について何も知らされないまま働かせられている不条理さを噛みしめながら、帰りの福島駅へと向かいました。



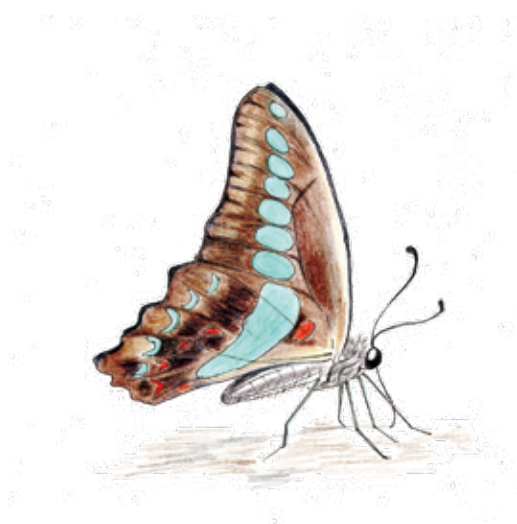
浪江町方向へ向かう赤宇木分岐点



除染された道路上での線量



山林に少し入ったところの線量



第12 回通常総会がおこなわれました

今総会は、例年のとおり、書面およびオンライン審議とさせていただきます。オンライン参加者と委任状を併せて会員総数の過半数を超え総会は無事成立しました。

以下の報告、並びに計画が承認されたことをご報告いたします。

・2024 年度事業報告、会計報告

また審議事項として

・2025 年度事業計画（案）、予算（案）

については、特に意見はなくご理解をいただきました。

2025 年度は

「放射能汚染の再拡散を止めるための活動と発信」を基本方針とし、

①放射能汚染拡散防止・被ばく低減のための活動

②放射能汚染監視のための知識・技術レベルアップ

③福島原発事故の実態とちくりん舎活動の次世代への継承

④ 情報発信力の強化

⑤ちくりん舎健全経営の維持

に引き続き取り組んでいきます。

皆様の益々のご支援、ご協力をお願いいたします。

（理事長 浜田和則）

2024 年度決算報告

（単位：円）

貸借対照表(2025 年 03 月 31 日現在)

科目	金額
I 資産の部	
【流動資産】	1,909,867
現預金	1779,867
未収金	0
預け金	130,000
【固定資産】	290,294
工具器具備品	98,566
建物付属設備	191,728
資産合計	2,200,161
II 負債の部	
【流動負債】	70,000
借入金	0
未払金	0
未払法人税等	70,000
前受金	0
【固定負債】	
負債合計	70,000
III 正味財産の部	
前期繰越正味財産額	2,280,117
当期正味財産増減額	-149,956
正味財産合計	2,130,161

活動計算書(2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日まで)

科目	金額
【経常収益】	
受取会費	465,000
受取寄附金	485,300
事業収益	1,613,500
その他収益(シボ・総会等)	28,000
経常収益計	2,591,800
【経常費用】	
事業費	2,449,759
その他経費	2,449,759
管理費	222,030
その他経費	222,030
経常費用計	2,671,789
当期経常増減額	-79,980
【経常外収益】	33
【経常外費用】	0
当期経常外増減額	33
税引前当期正味財産増減額	-79,956
法人税、住民税及び事業税	70,000
税引後当期正味財産増減額	-149,950
前期繰越正味財産額	2,280,117
次期繰越正味財産額	2,130,161

「リネン吸着法絶対値評価プロジェクト」その後の報告（3）

本プロジェクトは、昨年7月頃から検討を開始、具体的な活動開始から約10か月が経過しました。本プロジェクトの目的は一言で言えば、「リネン吸着法が大気中のセシウムを含む微

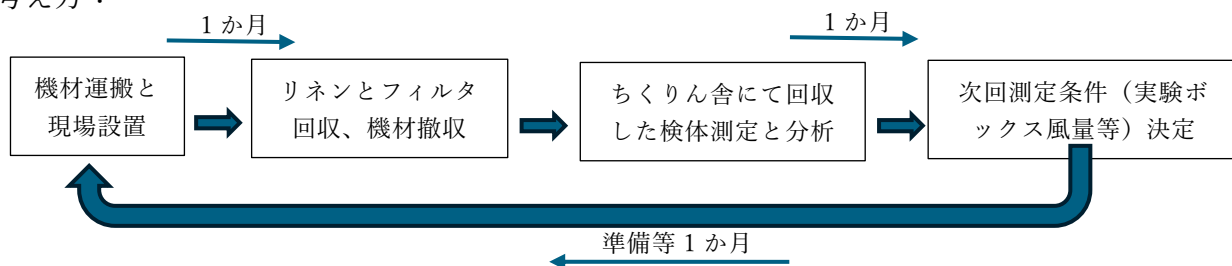
小粉塵を効果的に捕捉していることを、定量的にかつ科学的に裏付ける」ということとなります（ニュース第37号参照）。これまでの経過は以下ようになります。

日付	内容	場所
2024.10.24 ~11.24	吸気口、排気口にパーティクルカウンタを、内部にリネンを設置した実験ボックスを用いて、リネンの粒径別の粒子吸着率と吸気風量の関係等を調査。	ちくりん舎
10.24~11.4	双葉町中間貯蔵施設北側に実験地点を設け、屋外リネンを設置して事前データを収集。	福島県双葉町
11.26~12.26	同地点に実験ボックス、エアダストサンプラ、屋外リネンを設置し、各データを収集（第1回目）。	福島県双葉町
2025.1月~3月	各検体のセシウム量を測定し比較、実験結果を分析。	ちくりん舎
2025.5.19~6.26	双葉町実験地点でのデータ収集（第2回目）	福島県双葉町
2025.6.26~7.22	双葉町実験地点でのデータ収集（第3回目）	福島県双葉町

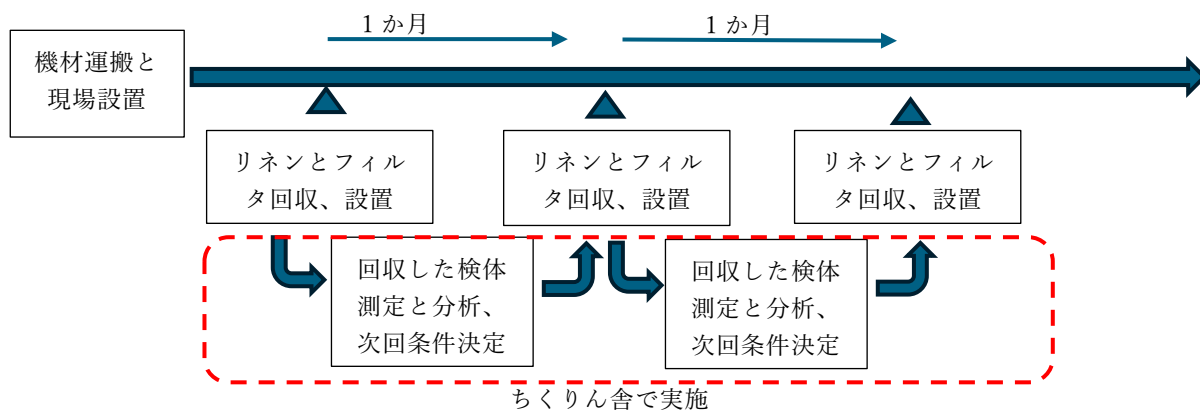
前回報告以降で、双葉町でのフィールドテストの考え方を大きく変えました。

その方針転換（下図）と、その理由について説明します。

従来の考え方：



変更後の考え方：



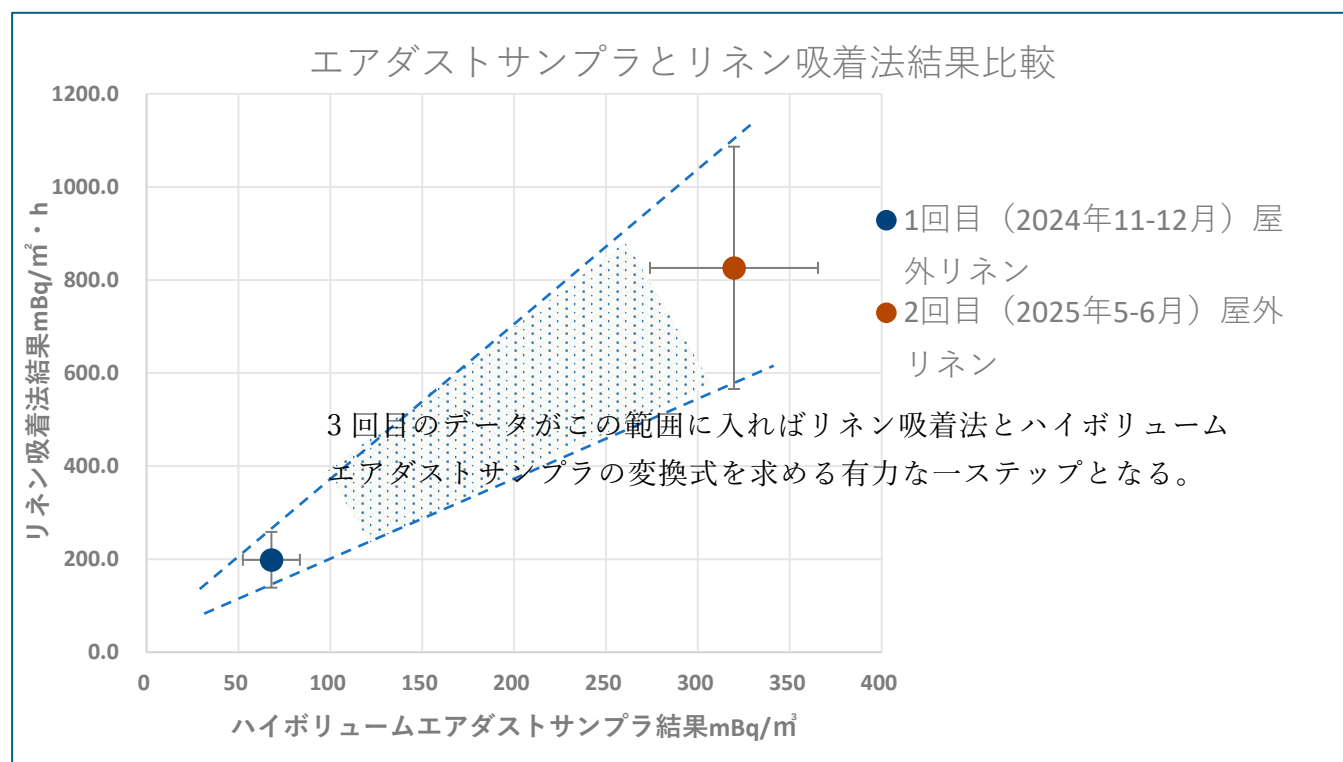
当初の計画で実施すると、

- ①機材搬送に大きなボックスワゴンが必要で車両レンタル費用がかかる。
- ②現地での機材設置、撤収に大きな作業工数がかかる。
- ③ちくりん舎へ持ち帰っての分析のため、現地テストサイクルに最低3か月程度かかる。

という問題がありました。測定機材を現地に常設して、ほぼ1か月毎に、現地へ出向きフィルタ、リネン回収と新フィルタ、リネン設置することで、

現地テストサイクルは一挙に短縮されます。また機材運搬のための車両レンタル費用も大幅にコストダウンできます。

このニュースが皆さんの手元に着くころには3回目のリネン・ダストフィルタの測定値が出ているはずですが、この原稿作成時点では未だ3回目検体の回収ができていません。それでも既に、今後の参考になるデータがでています。その一部をグラフに示します。



グラフではハイボリュームエアダストサンプラと屋外設置リネン吸着法結果との比例関係が見られます。3回目のデータが1回目、2回目の比例関係直線上に載れば（もちろん誤差範囲内での話ですが）、リネン吸着法からハイボ

リュームエアダストサンプラへの変換式が求められます。

データを積み重ねることでその精度が上がっていくことも期待されます。

福島原発事故と“今”の大学生

東京農工大での特別講義。普段のちくりん舎での活動ではあまり若い人と接することがないので、大学での講義はとても気になる。

東日本大震災当時、幼稚園生や小学校低学年だった子どもたちは、福島原発事故のことをそもそも覚えているのだろうか？

自分が話すわけでもないのに、とても緊張する。学生（若者）や先生（学識者）がどんな反応をするのか、話を聞く前と後では意識は変わるのか？

教室に入ってきた学生の中には話が始まる前から下を向きうつらうつらしている人もいた。ちょっと心配になったが、青木さんの話は学生たちを引き込み、すぐにみんな真剣に聞き、ノートを取る様子に学生のすごさを感じた。一度話を聞いたからといってすぐに意識が変わったり、理解できたりすることはないと思うが、この話が未来を考える「種」になっていくのだろうと考えると、活動していくことの大切さがしみじみと感じられた。

(T.A)



★ちくりん舎のXを立ち上げました！ フォローをよろしくお願いします。

<https://x.com/chikurinkun2012>



ちくりん舎 会員募集中

ちくりん舎では会員・賛助会員を募集しています。メールまたは電話、FAX でお問合わせ下さい。

●正会員

団体会員 / 年会費 1 口 10,000 円（何口でも）

個人会員 / 年会費 3,000 円

ちくりん舎の運営に関わり、ちくりん舎を支えていただく団体、個人です。

●賛助会員

年会費 1 口 1,000 円（何口でも）

ちくりん舎の趣旨に賛同して支えていただく方々です。ちくりん舎のニュースレター、イベント案内等の情報が受け取れます。

★カンパも随時受け付けています。

<市民放射能監視センター口座>

●ゆうちょ銀行

振込口座：00150-5-418213

加入者名：市民放射能監視センター

シミンハウシャノウカンシセンター

●他行からの振込の場合

店名 〇一九（ゼロイチキュウ店）

預金種目：当座

口座番号：0418213

Web サイトにてお待ちしております。

<http://chikurin.org/>

